

グローバルな視点を持った児童生徒の育成

—— キャリア活動を通して ——

前ジャカルタ日本人学校 校長

北海道網走郡大空町立東藻琴中学校 校長 岩本 謙一郎

キーワード：学校経営，キャリア教育，国際理解

1. はじめに

ジャカルタ日本人学校は、日本から南に約5,000kmの赤道直下の国、インドネシア共和国の首都ジャカルタの郊外にある。昭和44年（1969年）5月に開校し、1996年3月までは、ジャカルタ市内のパサルミングに学校があったが、校舎の老朽化と児童生徒数の増加に伴い、1996年4月に、現在のビンタロ地区に移転をした。2014年で、45年の歴史を重ねる。その間、巣立った児童生徒は、多方面でグローバルに活躍を続けている。

敷地面積79,192㎡、3階建て校舎3棟、小学部 中学部ごとに運動場、体育館、プール、コンピューター室がそれぞれにある。また全教室・特別教室・中学部体育館に冷房が完備されていて、快適な学校生活を送ることができる。

児童生徒数は、一時は1,200人まで膨れあがったが、暴動によって減少。その後増加に転じるが、鳥インフルエンザの影響でまた減少していった。私が赴任した2011年からは急激に児童生徒数が増加し、在任した3年間で350人ほど増加した（単一校舎では世界第4位の在籍数を誇る）。

2. 東アジア・大洋州校長研究協議会

1年に1度開催される東アジア・大洋州校長研究協議会が2年目にジャカルタで開催された。この研究協議会は、例年文部科学省より提案テーマが出され、各校長がレポートを提出することになっている。この年のテーマは「グローバルな視点を持った指導生徒の育成」であった。そこで、全体発表を行ったジャカルタ日本人学校の取り組みについて紹介する。

3. 中学部の実践から

ともすれば、「海外にある学校だから自然とグローバルな視点が身につくだろう」と簡単に考えがちである。しかし、ジャカルタ日本人学校では、現在文部科学省からも重要と言われている「キャリア教育」の視点で様々な教育活動を行い、その中に在外教育施設ならではのエッセンスを取り入れている。

子ども達のキャリア形成を育む活動の中に、国際感覚を育む活動を取り入れることで、グローバルな視点で自分の将来を思い描くことのできる児童生徒を育成することができると考えたからである。

—— ジャカルタ日本人学校「キャリア教育指導目標」 ——

個性を生かし、生き抜く力を養い、自己実現を図れるようにする。
国際的な広い視野を持つ生徒を育てる。

目標の文面にも「国際的な広い視野」という文言が含まれており、我々教職員も意識をしながら日々の教育活動を展開してきた。

次ページにあるのがキャリア教育の構想図である。

キャリア形成に必要とされる四能力が積み上がって行くイメージである。

そこで、「人間関係育成能力」を育むために、「コミュニケーション能力」「コラボレーション能力」を高める

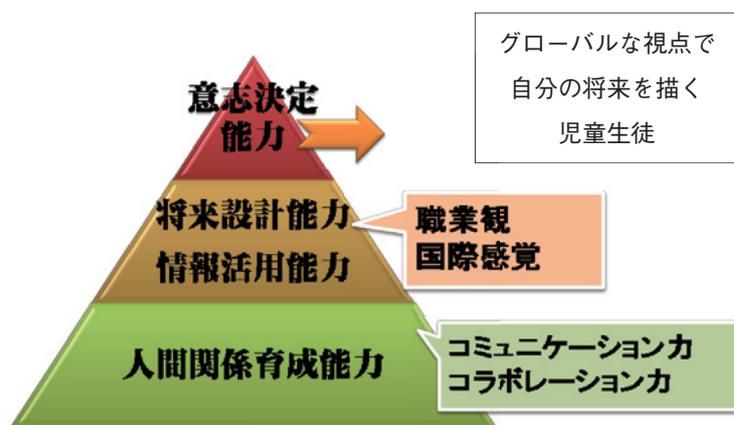
活動を行っている。

また、「情報活用能力」「将来設計能力」を育むために、「職業観・国際感覚」を高める活動を行っている。

最終的にこの三能力を高める事で、「意志決定能力」を育む事に繋がり、結果「グローバルな視点を持った児童生徒」の育成に繋がると考えたからである。

まずは、「人間関係能力」を高めるための活動についてである。

「コミュニケーション能力」については日常の学校生活での取り組みを、「コラボレーション能力」については学校行事での取り組みを中心に紹介していく。また、「情報活用能力」「将来設計能力」を高めるための活動については「職業観」「国際感覚」を育む取り組みについて紹介する。



(1) 「コミュニケーション能力」を育成する取り組み

①生徒会活動の充実

★公的な場で、自分の意見を発表できる力を

★学年を問わず、議論が成立できる集団に

この2つの事を念頭に取り組んでいる。

生徒総会では、役割や立場に合わせた発言や発表を意識させている。また、生徒会本部役員のランチミーティングを行っている。放課後が事実上ない日本人学校において、ランチの時間は学年を超えた話し合い活動の有効な時間である。

②「学部交流活動」の充実

★学年・男女の壁を越えて、学部の一体感を高める

★生徒自身による運営で、企画力・計画性を高める

この二つの事を念頭に取り組んでいる。

交流委員会主催の「お弁当集会」では教職員も輪の中に入り、交流を図っている。また、この他にも生徒会本部主催の「新入生歓迎会」等がある。

このように、生徒自身の手による企画・運営で、学部・男女を超えた交流活動を進めている。

③「プレゼンテーション活動」の充実

総合的な学習の時間を中心に、計画的にプレゼンスキルを高めている。また、コンピューター活用のスキルを高めることに主眼を置くのではなく、他の手法も含めて「情報を伝える」力を育てている。「職場体験事後報告会」では、パワーポイントを活用する生徒が多いが、紙芝居やロールプレイで発表する生徒も見られる。

現地校交流での発表では、現地校の生徒とデータのやりとりをしながら一つのプレゼンを創り上げ、体育館で保護者を招いて発表会を行う。言葉の違う人たちとのコミュニケーション活動は、在外教育施設ならではの活動である。

(2) 「コラボレーション能力」を高める取り組み

①体育祭

小中一貫校という特色を活かし、9学年縦割りを実施している。

★全児童生徒が関わり、共に創り上げる喜びを実感する

★生徒の手による企画・計画・運営で、先を見通す段取り力を身に付ける

体育祭では、この2つを念頭に取り組んでいる。

体育祭では、中学部全員による組み体操（男子）やダンス（女子）が行われる。練習の過程で、教え合いや話し合いの場面を設け、最高の演技の完成を目指す。また、本校の体育祭の目玉と言ってもいい、一団200名を超える縦割り団による応援合戦も行われる。中3の応援リーダーを中心に、演舞企画から練習計画の立案、団着や団Tシャツのデザインまで、生徒自身の手で創り上げる。まさに小中一貫校の特色を最大限に活かした取り組みと言える。

②「JJS フェスティバル」(いわゆる文化祭)

児童生徒実行委員が中心となり、小学部、中学部が協働して連帯感を高める行事である。また、日本人社会の絆を深める事にも貢献している。中学部が出店形式で小学部を招待する、「小中交流企画」があり、小学生の視点に立って、「人を喜ばせよう」とする気持ちが形となって表れる。

最終日のフィナーレでは、最後まで児童生徒が主役となり、会場の連帯感が最高潮に達する瞬間である。体育祭同様、小中一貫校だからこそできる行事である。

(3) 職業観の育成

①職業学習

第1学年では、働くことを身近に感じるために、「職業調べ」を行っている。身近な人の職業に関する内容をインタビューすることで、職種による仕事内容の違いやそこに至るまでの経緯を知ること、より職業について身近に感じることができる。

第2学年では、職場訪問を行っている。ジャカルタにある多くの日系企業等の協力を得て、様々な職種に触れることができるまたとない機会である。事前学習では、インターネットを活用して訪問先の情報をしっかりと理解してから、実際にインタビューしたり体験をしたりしている。

第3学年では、「インドネシア国会への訪問」と「在インドネシア大使館への訪問」を行っている。国会や大使館の仕事について理解を深める事はもちろん、キャリア教育の視点からも色々な話を聞くことができ、将来について深く考えるきっかけとなる。

また、小学部高学年との共同企画として、「職業講話」を毎年実施している。「海外で活躍する人」を招いての講演会で、様々な業種、立場の方からお話を聞けることは、これから国際社会で活躍しようとする子ども達にとっても貴重な経験である。

(4) 国際感覚の育成

①現地校との交流

第1学年では、音楽を通してのコミュニケーション活動を行っている。昨年度はリコーダーを現地の生徒に教えたり、お互いが合唱や合奏を披露し合ったりした。

第2学年では、日本文化の一つとして「書道」を教える、という活動を行った。そのためには、まずは自分たちが日本文化のよさを知った上で、相手に伝えるということが大切になってくる。

第3学年では、現地校へ出向いて日本語教室を開いた。事前に、現地校の生徒の興味関心のあること（音楽やアニメなど）をインタビューして、それを教材として指導案を考えた。当日は、日本語教室以外に、現地校で準備したレクリエーションを行った。

最後に、中学部で行っている「日本・インドネシア友好親善スクール」である。これは、様々な交流を通して、国際理解を深める事を目的としている。お互いの学校から実行委員を選出し、合同会議をくり返して企画

を進めていく。当日は、一日時間を共有することで、国の壁を越えた友情が育まれる。

4. おわりに

以上、色々な取り組みを行っているが、このようにキャリア形成を進めていく上では、コミュニケーション能力を育む事が、最終的にグローバルな視点を持った児童生徒を育てることに繋がると考える。

在外教育施設だからできないことは確かにある。それを補って、なおかつ在外教育施設だからできることを、教職員の熱意と創意工夫で積極的に進めていくことが、日本人学校としての使命であると考えます。

このように、平成22年度から3年間の文部科学省在外派遣期間において、本校の職員、現地の日本人会の方々、現地校の先生方、多くのインドネシアの方々から多くのことを学ばせていただいた。日本国内とは大きく異なる教育環境にも関わらず、様々な活動に積極的に挑戦する子どもたちから刺激を受け、在外教育施設の重要性を改めて肌で感じ取ることができた。

3年目には大相撲ジャカルタ巡業が開催され、日本相撲協会から和太鼓、スポンサーのトヨタ様から化粧まわし、そして、現地の大相撲支援委員会からは屋根付きの土俵がプレゼントされたことは本当に大きな思い出となった。

今回の在外教育施設派遣にあたり、派遣して下さった北海道教育委員会、常に温かいご指導とご支援を下さった在インドネシア日本国大使館、文部科学省国際教育課、外務省、海外子女教育振興財団、ジャカルタ日本人会、そして、大変お世話になったジャカルタ日本人学校維持会など多くの方々に心より感謝申し上げます。